

「イヤじゃないでしょ？」

小さなアリサは悪戯つぽい笑みを浮かべながら、すずかの胸に絡み付いた葛をキユツと引つ張ってみせる。

「ふあ……」

その力加減は絶妙で、痛いと言うよりも強めのマッサージを受けている感覚に近い。すずかの豊満な胸は更に締め上げられ、大きさと形が強調されていく。

「フフ、スゴいおっぱいよねえ」

量感たっぷりそのバストは、小さなアリサの手には余ってしまふほどの大きさだ。たわわに熟れた果実のようでありながら、指に返ってくる瑞々しい弾力。張りと柔らかさが両立している見事なバストである。

「不思議よねえ。すずかつてここコンプレックスのハズなのに……」

小さなアリサは掴んでいた手を一度放し、今度は人差し指で螺旋を描くようにすずかのおっぱいを麓から頂上へ向けてなぞっていく。

嫌悪を抱くはずの指遣いが擦ったくて仕方ない。触れる触れないかの微妙な感覚に身体がピクピクと反応を示してしまうのだ。

その指は徐々に登坂を続け、あと少しで頭頂部に達しようという位置で止まり、「私の前だと随分大胆……」

耳朶へ息を吹きかけるよう囁きかけ、わずかな間を置き。

「よねえ？」

指先を一気に頭頂部へ押し込んだ。

「ひあん……っ！」

直後、右胸から全身へ得体の知れない感覚が駆け抜けた。

自分でも驚くほどの声を上げてしまった彼女は、頬を真っ赤に染め、小さなアリサから視線を逸らす。——身体が自由になるならすぐにも逃げ出したい。

「駄目よ。すずかが素直になつてくれるまで逃がしてあげないんだから」

そう言って小さなアリサはすずかの頸を持ち、その視線を自分へと戻させた。釣り上がり、更に緩む彼女の口元。その水草の一つ一つが本物のアリサとそっくりな物だから、すずかの頭はますます混乱していく。

相手はカードだ。カードが見せている幻か何かだ……。

それは分かっているのに、身体は無意識に未知の快感を覚え、反射的に反応を返してしまう。自分の心の奥底に眠る欲望を引きずり出されるような感覚。

「こうしてあげればもっと素直になつてくれるかしら」

言うが早いか。すずかが心の準備を整える前に、小さなアリサは素早く胸の先端部を服の上から摘んでみせる。

「ああんっ!!」

明らかに悦びの声を上げ、すずかの全身が戦慄いた。それは結果的に自身の身体を振らせ、縛り上げている葛を更に食い込ませた。

泡に濡れた人肌で締め上げられているような感覚は、どう頭の中で退けようとしても奇妙な心地良さを生む。この感覚に囚われてしまうのは非常にマズイ。

「うふ、やつぱりね♪」

小さなアリサはポリウムを捻るようにして、指先の感触を確かめる。

「あん！……やあ、ん……」

鼻に掛かった甘い声を上げるすずか。固く閉じられた両目の目尻に涙が浮かぶ。「私、知ってるのよ？ すずかつて……」

すずかの身体へ寄りかかった小さなアリサは、まるで耳朶を甘噛みするような仕草でポソポソと何やら呟いた。

直後、すずかの顔が一気に赤く爆発する。

「私そんな事まだしてない！」

締め上げられる事など構いなく身体を揺すり、金髪の少女の小さな身体を撥ね除けようとする。だが当然ながらそれはまた徒労に終わった。少女を振り払える所か、葛はますます身体を自由を奪い、すずかの心に絶望にも似た脱力感を与える。

「ふうん♪……ま・だ・ね？」

それを待っていたように、クスリと妖艶に微笑む金髪の少女。

「意味知ってるんだ？ まだって事は、いずれ私もオカズにされちゃうの？」

気色ばむ小さなアリサに対し、すずかの頬が羞恥の赤で見る見る染まっていく。「そ、そんなの……」

すぐに否定出来ないのはそう言う思いが心のどこかにあるから。

「それじゃあ、今すぐに実現してあげるわ♪」

小さなアリサは楽しそうに微笑み、服の上から乳首をつまみ上げていた指を今度はすずかの下半身の方へ。臍を軽く擦り指は下腹部へ向けて下りていく。

「やあ……」

半分涙声になりながらすずかは首を左右に振る。ピリピリと伝ってくる擦ったさを必至に否定して。

「大丈夫。すぐに気持ち良くなるから。すずかは好きなんでしょ？ 私の事」